

P8-8 放射線治療実施時のランソプラゾール投与による副作用抑制効果の検討

長谷川 剛・大谷 真一・遠藤 俊輔・佐藤 幸夫・

斎藤 紀子・山本 真一・蘇原 泰則

自治医科大学外科学講座呼吸器外科部門

(背景)術前及び術後の放射線治療は、進行した胸部悪性腫瘍に対する治療戦略において重要な役割を担っている。しかし照射野に食道が含まれる場合副作用である放射線性食道炎によって治療継続が困難になる場合がある。今回我々は放射線治療における食道炎は逆流性食道炎と関係があると想定し、放射線治療患者にプロトンポンプインヒビター (PPI) 製剤であるランソプラゾール (LPZ) を投与して治療効果を検討してみた。(対象)当科において胸部悪性腫瘍に対する術前及び術後の放射線治療実施患者で、当研究に同意の得られた14名を対象とした。また同じ時期にLPZを投与されず放射線治療を受けた患者群と比較した。(方法)初期治療としてLPZ30mg 1日1回を8週間、維持療法としてLPZ15mg1日1回を4週間投与した。治療開始前、4週後、12週後にアンケート調査を行い逆流性食道炎に対する自覚症状をスコア化した。定期的に採血検査を施行し副作用を確認した。診療録から摂取食事量と患者の訴えを抽出し食道炎の評価を行った。嚥下障害により経口摂取量が50%低下したものを食道炎発症群とした。(結果)LPZ投与群では21%の食道炎発症であった。一方非投与群では75%の食道炎発症が見られた。スコアでは有意な所見は得られなかったが、治療開始前のスコアが高値例では、LPZ投与例でも強い副作用が見られた。(考察)放射線治療実施時のLPZ投与は安全に施行可能であった。放射線治療時の食道炎は、LPZ投与において著明に抑制された。本研究より放射線性食道炎の増悪因子のひとつとして胃酸の逆流が示唆された。